

近世期の町は「町」

「準町」「在町」があり、肥後藩では「町は五ヶ町」「準町は三町」「在町は十三町」で、五ヶ町には町奉行、準町ではそれぞれの属する郡奉行、在町には

藤家の時代で実に三百七十年の町としての歴史が文献に見られ、町数、屋敷数が登録され、月に、三、六回の市日が定められている。

肥後国誌に

馬見原町 上番所

上番 一人 下番 二人 勤番之、当時は二人より多しとあり、上番とは町奉行所の事であろうか。

在町として繁栄した馬見原は豪商が軒を並べて清酒、味噌、

醤油、茶、米穀等の生産及集荷も行なわれその経済圏は高千穂

方面に及び、知保郷の中心的存在で軍事上は日向の国境と、惣

庄屋の記録でも伺れる。こうして繁栄した馬見原町も時代の変

遷には抗し難く、明治二十年（一八八七）頃を頂点に漸次凋落

の一途を辿る結果となったのであるが、古い町並、豪商の白壁

の土蔵、石造の倉庫などが当時の道筋に残されている。

和名類聚抄、大宰府管内誌、などに紹介された「なちらう高中」の地

続の地、知尾（知鋪）の一部なりともある。

文明年中（一四六九）に「いゑ、四、まめわら殿」更に「い

ゑ、八、上はるおの」「いゑ、卅（三〇）おきはら」と附近の

村があるが、恵良氏、菊池氏、甲斐氏の影響は大きかったとさ

れている。

行、在町十三町には、元禄十五年（一七〇二）に町奉行が置かれていたが正徳二年（一七一二）頃に町奉行は廃止されている。このほかの在町は村と同じ取扱を受け、町並を形造った処は「町」と呼ばれ「町別当」が任命されている。これらは「村庄屋」の支配下にあったといわれる。

馬見原町は在町として、前記の十三町にその名があり、町奉行が置かれ、御高札場があった。然し藩内の大寺社を統轄する「寺社奉行」は熊本町の寺社奉行が兼ねて居たとしている。此の頃は「町が五」「準町三」「在町十三」となっている。

馬見原町の歴史は「元和年間（一六一五）に町の名が見られるが、下番番所の天和三年（一六八三）より六十八年前の、加

史跡 菅尾手永会所跡地

所在地 大字菅尾



「菅尾手永大惣庄屋兼代官所を手永会所と称し寛文十年（六六三）（約三〇〇年前）肥後国主細川公となり米山号を廃して菅尾と改称、郡代指揮のもとに管内

の政務を司とってきた。

緑高六千二百十九石八斗六升二合三勺と云われ県下でも大きな手永であり、実に当時の六〇ヶ村（旧馬見原町、菅尾村、柏村、小峰村一円）を明治の初まで統政された由緒のある土地である」。

との碑が昭和五十二年に蘇陽町によって建立されている。

史跡 栂山番所址

所在地 大字橋宇栂山

栂山

肥後国誌に

一、栂山村 百七十九石余

栂山下番所 日州境なり、

百姓兩人在番之 当所よ

り日州県領萩原村への道

筋国境まで、とある。

「御高札場」もあつたが、文

化八年（一八一）八月御高札

場は火災によって焼失したと小

崎家の系譜に述べられている。



史跡 番所址

所在地 大字滝上下番

「私高祖父猪右衛門と申す者、菅尾手永御惣庄屋菅尾市兵衛次男にて御座候、天和三年（一六八三）九月馬見原町下番人相勤申候ところ彼方にて病死仕右猪右衛門私曾祖父猪右衛門、元録七年（一六九四）九月一領一疋」と代々世襲している。天保年間（一八三〇）に「唐物抜荷改方（密輸）御横目役」など明治二年まで七代に亘っている。

建造物 目鑑橋 (一基)

所在地 大字滝上下番

菅尾惣庄屋九代山村市兵衛、

下番番所六代山村三郎兵衛の天

保十一年(一八四〇)四月十八

日馬見原口目鑑橋懸方一件始末

の功により、惣庄屋市兵衛に作

紋単羽織。下番番所山村三郎兵

衛に金子二百疋を下し置かれ候

とある。

目鑑橋は若永三五郎が若い頃

架けたものと言うが、昭和五十



四年四月四日付で、(諫早市原口町六八〇の二に居住)山口祐

造氏は「三五郎は当時まだ二十五才ぐらい、急傾斜地の難工事

ですでに名工の片鱗が伺えます」として

一、年代 文政〜天保の頃 四、径間 三・〇 m

二、橋長 五・二 m 五、拱矢 一・九 m

三、橋幅 三・二 m 六、拱厚 〇・四 m

と実測図を添えて回答を寄せられている。

系譜によれば

石工 岩永家

字七 ↓ 三五郎 (二男)

石工 橋本家

林七 ↓ 嘉八 ↓ 勘五郎 (三男)

となっている。

建造物 目鑑橋 (一基)

所在地 大字下山宗旨ヶ鶴

古米川下流、宗旨ヶ鶴地内にあり、アーチ型の石橋である。

架設年代、架設者は詳でないが、技工は大分方面から来たもの

と言う。破損が相当進んでいるので、その対策が望まれる。

史跡 上古代史の里

所在地 大字塩原斗塩、大字大野

昭和五十六年六月二十六日付熊日夕刊に「神武天皇は実在の

方、蘇陽町斗塩が生誕の地固く信じる住民」と見出しがあり、

神武天皇は原田家の座敷で御誕生になり、三百メートル程離れた

た「そうず神生須ヶ池」で産湯を使い、ヘソの緒を埋められた「天皇

塚」また母君の「田間菜比売命」はここで御終焉になられたた

め葬られた塚があり、毎年四月三日に地区民が天皇祭を行って

いると報じている。



熊本市池上町五八五ノ九、本
田留蔵氏は「上古代史の再考」

を著作し、その中で

- 一、幻の上古代 二、古事記の系譜は真夷 三、根の国の起り 串間 四、英雄神イザナギ大王の東征 五、地名の移動 六、高天原の成立 七、大王の墓は何処か 八、大日女ひるめの貴むちの宮居は何処 九、日向三代の事蹟



- 十、倭イワレ彦の第二次東征 十一、奴の金印は誰のもの 十二、葛城王朝と耶馬台国 十三、崇神王朝と耶馬台国 十四、思想の変化、竜

神、天神、日の神

として解説されているが神武天皇御東征は前後二回とされ、宮居は斗塩の宮と述べられているが詳細は省略する。

斗塩の原田家の家紋は、田、であるがこれは「田間菜比売命

（神武天皇の御母君）の、田、であることで熊日記事のとおりである。

然し乍ら遠い時代の事で、現在迄の学者が研究されても解明出来得ない事柄も多く此の後の研究に待つ外はないと考えられる。

史跡 鏡山

所在地 大字馬見原



明治十年（一八七七）の西南の役は、維新後の日本政府に取り一大難事であったが、薩摩軍は田原坂の激戦に敗走し、鏡山陣地の官軍を攻撃して激戦となり、五月十四日朝に官軍は鏡山陣地を奪取され、馬見原まで後退し、加えて雨の中の防戦が馬見原中心に午後五時頃まで行われ、戦死者は官軍が二十名（熊

本鎮台十三連隊）薩摩軍十名と尊い犠牲であったと言う。

官軍の本陣（司令部）は本八代屋であった。馬見原町の町家の二階の柱には弾丸の跡が残っている家がある。「加勢群は五

軒の家が全部が薩摩軍に焼かれたり、又は所用で馬見原町まで出掛け人は弾丸の来ない安全な道を通って帰った人。薩摩軍から道案内させられたり、人夫を強制されたりして大変な苦勞させられていると、西南役戦記に述べられている。

鏡山山頂に記念碑が建立され当時を物語っている。

史跡 服掛け松

所在地 大字長崎



明治二十六年（一八九三）九月皇族であられた北白川宮能久親王殿下が「工兵隊野堡術演習御検閲の折に軍服の上衣を松の枝に掛けられたとの由来がある。

記念碑の題字は陸軍大將林仙之・之謹書とある。殿下には翌明治二十七年に、台湾の蛮族征討に御出征されたが、彼地に於て病となられ、従者からの療養の

奨も断られて、駕籠を召され、戦線の指揮を取られ、終に戦病

死されたのである。

それから幾星霜か経た今日、「服掛松」の台地は観光地とし

て春、夏、秋と観光客の旅情を慰めているが、野堡陣地の濠の跡の深さもそのままに、老松に渡る風の音に、記念碑が応えているかのようである。

遺跡 岩風呂の址

所在地 大字高畑

通称「湯の元」と呼ぶ所にあり凝灰岩質の岩から良質の湧水が数ヶ所にある。此の岩に数ヶ所の横穴が見られる。此の横穴に焚火して消火し、余熱の床に葉草を敷き、水を散水して入口に蓆をかけて中に入りて発汗した後、水を浴び心身爽快となり「薬師如来」の御加護があると信仰した由来のある処である。

遺跡 岩風呂の址

所在地 大字今字風呂の上

内容は前述の通りであるが、現在は湧水がなくなっているが、川の水のみがある。

遺跡 川風呂の址

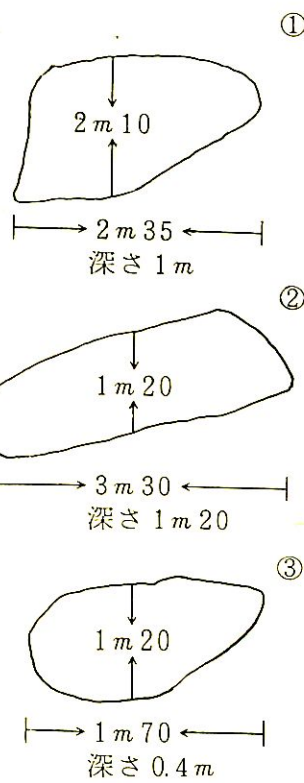
所在地 桃山東側川走川の川原

川走川の川床の岩盤に穴がある。此の穴に水を注ぎ、更に川原で川石を数十箇焼いて投入。温水化して入浴していたと言わ

れている。勿論水と薪が必須要件でその要件が満される処である。

川風呂は天然の穴に一部人工が加えられ、岩壁に階段状の通路が設けられている。

現在残されている湯壺は三ヶ所あり



となっている。

この地区では、日割を行って順番に使用していたと伝えられている。

遺跡 川風呂の跡

所在地 大字長崎下長崎

宮崎県境の五ヶ瀬川沿に「蛇淵」と呼ぶ辺りにある。下長崎地区の古老の人々が、川風呂を岩風呂とも云い、この使用方法も伝えられているが、往時は「風呂入りに行く」との話があったと云われている。

遺跡 古代住居の址



所在地 大字高畑字八ヶ迫

大字玉目字飯塚

大字今高尾

此処は原野開墾の時に石包丁、土器、その外石器類が多数出土しているが特に注目すべきは、石器を作る際の「原石」が出土していることである。住居の跡と思われる直径十メートル位の円形に土色が変わった所が数ヶ所見られる。この外各地区に、土器がほぼ完全な形で出土している箇所も数ヶ所ある。

遺跡 虎御前の森



所在地 大字長谷（長谷小学校横）

通称 トラゴゼと呼んで居る。

以前には朽木の古木があったが現在でも古木が数本ある。有名な曾我兄弟の兄十郎の妻が尼となり諸国を供養のため行脚して供養した処と言う。

史跡 高 仏

所在地 大字今

標高六百十五メートルの測点あり。

嘉永四年（一八五二）建立の「今村越前守」（山部家）の碑がある。

今地区の山野之墓ともある。以前は、今地区の中にあつたものを昭和の初年に移転したものである。肥後藩に於いて、原野



とも言われている。

遺跡 処刑場の址

所在地 大字高辻字赤石

大字高畑字大迫

通称、ムニヨの原、不浄の原と呼ぶ。

江戸時代の旧暦十二月二十日は「果の二十日」として罪人の処刑が「ムニヨ」の原で行なわれ、処刑された罪人の首を不浄の原で晒す時に赤立の原に赤旗を立てて示し、不浄の原で僧侶達が供養したとされている。

昭和二十年代になり処刑所跡にあつた土塁の跡や古木の森も畑となり、切株の芽生た二世のタブ木あり、処刑された罪人を葬った無縁墓及び供養碑は高辻字前に散見される。

を各地区に区割する際に代表者が出夫して標示した事は、何処の地区にも伝えられているが、今地区では此の代表者を祀ったと伝えられている。別名「野分の墓」



元来「ムニョ」とは仏教から出た言葉と言う。

彫刻 六地藏

所在地 大字二瀬本字町

石殿（六体の地藏尊）

室町期（一四〇〇〜一五〇〇）の後期の作と認みとむとあり

所在地 大字下山字前畑

石殿（八体の地藏尊）

大永六年（一五二六）の銘あり

所在地 大字馬見原

一体型（頭部破損）

台座に、享保三戌（一七一八）奉寄、小陳弥吉とある。



六地藏尊とは「一王発願して永く罪苦の衆生を度して、未だ成仏を願わざるもの、すなわち地蔵菩薩是なり」とし、無数の分身に変化びげして六道（地獄、餓鬼、畜生、修羅、人間、天上の六界をいう）の地藏尊を言うとされ、六体の地藏のことを言う。建立の理由（願がん意）（場所）は、

地藏信仰が全国的に隆盛を極めた一つの理由は、地藏尊は現当二世を司る仏であるという考え方から、ほかの仏尊よりも信者が多く、さらに十王信仰、庚申信仰、観音信仰などの習合ということもあって、全国で最も多い作造を見ているものと思

われる。

それだけに建立の理由（願意）も、現在までに九州各地で知り得たものをひととおりまとめてみると、次のとおりであり、もちろん、細かく分類すればまだまだ多くあることが考えられるが。

- 1 部落の出入り口の路上に集落の安全、悪疫の没入防除、往来人の安全を祈って建立。
- 2 先祖供養、子孫の安穩を祈願。
- 3 火災消防除その他の祈願。
- 4 夭折者の墓として（夭折者の供養と後生者の長寿を祈願）。
- 5 一人の墓石または供養として建立。
- 6 墓地の出入り口に、その墓地の護りとして建立（一基または一對）。
- 7 祈願成就のお礼として建立。
- 8 地藏講衆による建立（逆修）。
- 9 地藏講、庚申講衆による習合建立（逆修）。
- 10 道しるべを兼ねて建立。
- 11 献灯用の火袋を併せ備えて建立。
- 12 納骨堂の護りとして建立。
- 13 戦没者の冥福を祈って建立されているとある。

遺跡 経塚

所在地 大字米迫字大迫

経塚の由来は、山川、所謂家の外に於て不慮の死、又はその外に供養の必要がある場合に小高い岡の上に経文を経筒に収め、土中に埋め供養した処と伝えられる。

説に依れば阿蘇三十六坊の拌み所とも言う。地名も「経塚」「京塚」「高塚」として数ヶ所にその名残があるが「施餓鬼」があった所もあり、人々の信仰の跡でもある。

花立原

所在地 大字玉目字花立

説に依れば、此処に花を捧げて、高千穂野（清和村）の天神森にある御陵を拜んだ所とも言うが、天神森が指呼の間に望まれる所である。

建造物 宝塔

所在地 高畑年称神社境内

高畑地区は、住時弘法大師の信仰が厚く、信者にとりて一度は四国八十八ヶ所の霊場を巡拝することが念願とするところであつたが、種々の事情で一部の人々のみが念願かなつて霊場巡拝するのみであつた。

この人々が持帰つた霊場の土を此処に埋めて朝夕拌んだのが始りであるが、信者の希望に依り、弘化三年（一八四六）に浄財を得て四国八十八ヶ所の霊場の仏像八十八体を石像で刻み、高畑、下山、橋、二瀬本、柏、花上、八木、今、米迫、塩出迫、上差尾、大見口、二津留、玉目、長谷、伊勢、東竹原、柳、の



各地の数ヶ所に一ヶ所に一体、
数体を安置して「柏在八十八ヶ
所」としての霊場を作り信者の
巡拝を行った。

然し乍ら安置した仏像は「七
十八体」で残る「十体」は高畑
の宝塔に安置してある。

宝塔の継ぎ目の部分は「ほそ
穴」になって居り、継目の処に

「維時弘化三（一八四六）丙午

年夏吉辰、石工、坂梨、栄七、藤吉、光太、と刻まれている。

建立以後は此処で「施餓鬼」の供養が行なわれている。里人
たちの信仰も厚くなり、宝塔建立の願意が達せられたのである。

井竿五右衛門は宗旨ヶ鶴の人で阿蘇家の家臣として仕え、文
献、長刀等が残され

ている。碑文に、

去天保十二之春巡拜

四國八十八所之宝刹

時悉取霊場之主而婦

象来平朝于夕此分直

柏在其上勧請諸尊欲



成於自他同二世安樂之行願久然今度始修理隨喜者多而馳于東西

勧進有縁回于南北乞助力處受不料之財施得不期之人力遥自猫岳

麓不厭里程仕數萬之人夫運石忽命石工新建立宝塔於此地勧請金

毘羅宮於塚野原安置諸仏於柏在八十八所連令満足宿願者也

井竿五右衛門道弘

弘化四未春建立

妙光徳釈法道寿光信士

歳 六十七

（大要は次のとおり）

去る天保十二（一八四一）の春四國八十八ヶ所の宝刹を巡拝
せし時ことごとく霊場の土を取り歸りて朝に（于）夕に（于）

此の土を柏在（村）に分け直（あた）う其の上に諸仏を勧請し

（自）也同（ひとしく）二世安樂の行願を成（じょうぜ）んと

欲すること久し然して今度修理を始んとす随喜者多くして東西

に（于）馳せて勧進し有（縁）南北に（于）回（めぐり）て助

力を乞いし処料（はか）らざるの財施を受け期せざるの人力を

得（う）遥か猫（根子）岳麓より里程を厭わず数万の人夫に委

せ石を運ぶ忽ち石工に命じて新たに宝塔を此の地に建立し金毘

羅宮を塚野原に勧請し諸仏を柏在八十八ヶ所に連（つら）ねて

安置す宿願を満足せしむる者也

弘化四未（一八四七）春建立

宝塔の経文

經云

能於此塔一番一花礼拝供養八十億劫生定重罪一時消滅

伏願

令上皇帝宝祚萬々歳大懽君代武運長久天下太平国家安全風雨順時五穀能登一切羣生皆歸正法鄉黨同行四來縑素見聞毀譽生々世々六親眷屬及無依無怙法界之萬靈同生極樂成等正覺

維時 弘化三(一八四六) 丙午年夏吉辰

と刻まれている。

建造物 板碑(一基)

所在地 大字高辻字前三五三

線刻 阿弥陀三尊

(阿弥陀に地藏菩薩、

合掌手比丘形像の組合

せ)

于時大永七年丁亥三月

吉日

施主 敬白

大永七年(一五二七)以前、東照山東光寺の寺内である(昭和五十六年に凍害に依って大永七年の銘が欠損している)。



建造物 無縫塔(一基)

所在地 大字柏元柏

無縫塔が一基建立され

ている。由来については、詳でないが伝えられている。

無縫塔については、鎌

倉時代に禅宗の僧によってもたらされた墓塔形式

とある。別名「卵塔」と

も呼ばれている。

建造物 円墳(一基)

所在地 大字長谷倉木山入口

経緯については詳

でないが、墳墓は頂

点まで約十五メート

ル位の円墳で頂上に

鎌倉期風の宝篋印塔

一基他が安置された

典型的なものである。



建造物 円墳(一基)

所在地 大字塩原字打棒木

経緯については詳でないが、墳墓の頂点までは型状が崩れている。頂上に層塔一基が安置されている。円墳全体に樹木がある。

建造物 坂本氏の墓(一基)

所在地 大字滝上須刈

一説には坂本城(五ヶ瀬町)落城の砌り坂本家の先祖が此処に來りて、坂本城落城の憤懣やる方なく果たと伝えられている。形状から見て円墳ではないかと考えられる。附近に坂本家の祖と云う元文元年(一七三六)の墓がある。

建造物 経石(一基)

所在地 大字塩出迫上塩出

共同墓地内に「法華経さん」と呼ぶ墓あり。寛延四年(一七五二)辛未曆、积誓門とあり。(注此の年は十月二十七日に室



工芸 鰐口(一個)

所在地 大字玉目

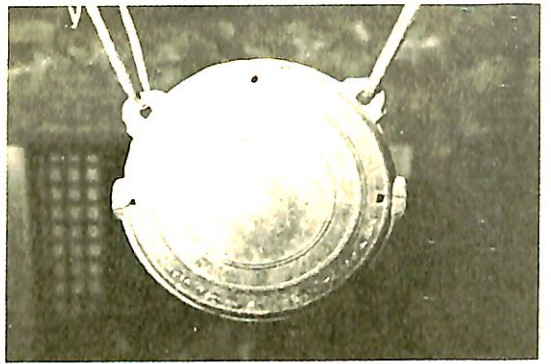
西光寺积迦堂

前 敬白

「奉懸鰐口之事緒方莊目志野名内西白寺十一面観音薩埵御宝(一五四二)壬力(寅)十二月十八日、と銘がある。

西白寺は大分県大野郡緒方町大字野尻にある禅宗の寺で、鰐口の経緯については、天文年間に豊後地方から大友の軍勢が進撃して來た節に大友軍が士氣を鼓舞するため、銅鑼などと共に

曆と改元)経石が埋めてある。経石とは直径四〜五センチの川石に一個に一字の経文を墨書して供養、願意としたもので、同地の経石は直径六〇センチ。深さ一メートル二十センチ程度の甕に入れてあるが、この中に「等」「三」の判読出来るものがある。経石の数は相当な数と推定されている。



遺跡 赤立

叩いて行軍したものでないか。
豊後地方は古来から仏教の盛んな地方であるとの回答を緒方町（大分県）の三代氏みしろから得ている。

所在地 大字高畑

正平年間（一二三四六）に早奈良村の中に「あかたて」とある。赤立の由来は、兄弟関係にあった草部吉見神社と高畑年弥神社の社家が祭典日に双方が赤旗を建てて標示したと言う所である。

高畑年弥神社は往時は此処にあり通称「天神森」と呼ばれている。年弥神社が現在地に移転したのは南北朝頃と言われる。肥後国誌に「祭式昔は神幸あり今猶祭日には旧跡に神供奉幣神楽等執行す」とある。



遺跡 里数木の跡

日向往還と竹田往還との交差点であり、一説に、不浄の原で罪人の首を晒す時に赤旗を立てた所としての由来も残されている。

所在地 大字柳字力石

大字東竹原字東原

南郷往還（日向往還）に一里毎に植られた「榎」の跡に植継がれたと云われる榎が現在でも繁っている。この往還は、（熊本）高森、柳、日



向泊) 赤立にて竹田往還(上差尾) 長谷) 高辻) 高畑) 赤立) と合流して草部に至る往還である。

遺跡 宿場 「日向泊」
ひゅうがだまり

所在地 大字東竹原字日向泊

日向往還の宿場。茶店があった処で、この宿場に收容しきれない旅人は柳村で收容していたが、柳村には酒造場、揚酒屋、茶店があったとされ、その地名が今でも残っている。



遺跡 宿場 「宿の谷」
しゆくたに

所在地 大字玉目字宿の谷

高森から中坂峠を超えて高千穂方面に至る最短コースであり、宿場、茶店等がありて旅人の憩の場と伝えられている。



遺跡 五輪坊

所在地 大字大見口積所

町有林の近く標高八二一mの高地は通称「五輪坊」と言われ種々の説がある。一説には土行が行なわれた処とも言う。近年に至りて「五輪塔の空輸」を手にとって見たとの話が、昭和五十九年にあった。

このことは伝えられている土行の説を裏付けているのであろう。

火伏地藏秋葉神社

所在地 大字二瀬本



本、長谷方面から行なわれていると聞く。

境内に、「弘化三年（一八四六）建立にかかわる等身大の石の仁王像があり、台座に刻込まれた寄進者世話人が多数あるが、そのなかに日向屋、備前屋、吉野屋、備前屋半助の文字が見られる。住時の馬見原町に在った豪商連の一部の人々の最も恐れられた火災の災難除けの信仰の現れであると見てもよからう。

火伏の神として古
来から近郷近在の里
人の神仰が厚い。祭
日には神楽が奉納さ
れる。
今尚、毎月二十四
には月参りが、二瀬

とあり、この建立の由来は詳でないが建立以来、八百年余の歳
月が経ている。

二条
三全
四全

天然記念物 白石鐘乳洞

所在地 大字白石高影

此処には鐘乳洞があり、以前から知られているが開発されて
いないので詳細は判っていない。

一説には、白石の地名は、これから付けられたとの説がある。

天満宮の由来について

菅原道真公は、平安時代の、承和十二年（八四五）に学者、
政治家菅原是善の子として生れ、文章得業生を経て渤海使ほっかいしの接
伴員、文章博士となり、更に藤原氏の権勢を押えようとする第
五十九代の宇多天皇に登用され、寛平三年（八九一）に藏人頭くらんとく
に任ぜられ、寛平六年（八九四）遣唐大使に任ぜられた時に遣
唐大使の中止を進言したので、遣唐大使は派遣されなかった。
第六十代の醍醐天皇も道真公を重用されて、昌泰二年（八九九）

建造物 水道院大神の板碑（一基）

所在地 大字二瀬本町

奉納 水道院大神

寿永元（一一八二）壬寅 藤原宗勝

三月十有七日

に藤原時平を左大臣に、道真公を右大臣に任せられた。然し藤原氏の讒言ざんげんの為と言われているが、延喜元年（九〇一）に大宰権師くわんしに左遷される結果となった。九州の大宰府にあった道真公は、日夜天皇の御恩を忘れることなく、天皇から賜った御衣を眺めて京を偲んだ。有名な、「去年今夜清涼に待す」との詩はこの時のものと言う。

こうして配所にあった道真公は、延喜三年（九〇三）配所の大宰府に於て、五十八歳でその一生を終えられている。

道真公の死後に相次ぐ異変が起ったため、道真公のたたりと恐れられ、その罪を取り消されて、第六十六代の一条天皇の正暦四年（九九三）に至りて正一位太政大臣を贈られた。菅原道真公を祀った天満宮は、この頃から「祀るべし」とあったとも言われている。民間では京都北野の天満宮は、これ以前に祀ったものと言われている。

公は誠実温厚な人で、文章、和歌、特に漢詩にすぐれ、「類聚国史」及び「菅原文章」「菅原後章」「新撰万葉集」の著書があると言う。

今日、蘇陽地方も「天神さん」「学問の神さん」として親しみのある天満宮である。

以下、天満宮について、その所在を知りたいと思うが、処に依っては外の仏像と合祀されている所もある。

天神とは天満天神（菅原道真）と言われている。本来は「国津神つかみ」に対する「天津神あまつかみ」の総称であり、各地に天神を祀った神社が多かったが、この天神が菅原道真を祀った天満宮と解されるようになったのは、平安時代の中期（一〇〇〇）頃である。非運な晩年を送った道真公のたたりで、京都地方に悪い病気が流行すると考えられ、京都の北野天満宮が、これを鎮める役割を果したことに由来する。

やがて各地にあった天神社は御神体を道真公に統一されるようになったとしている。

江戸時代になり、各地に末社が建立されている。寺小屋などでは、道真の忌日を二月二十五日とし、毎月二十五日に絵像を掛けて礼拝していたと文献は伝えている。

建造物 菅原妙見神社

所在地 大字柳井原字村の前

棟簡によれば、天歴九年（九五五）とあるも現在地に移転されたもので、その年代は詳でない。この時に奉納されたものであろうか、四十枚の絵画に各々奉納者の氏名が記入されて格天井に組込まれている。

以下天満宮、天満堂の所在地について列記する。現在は合祀してある処もあり、頭初的狀況とは變つてゐる処もある。建造物



名称	所在地	参考事項
菅尾天満宮	菅尾	層塔あり
黒原天満堂	黒原	明治十年塩原地区の神をまとめたもの
八矢天満堂	八屋	
花寺天満宮	花寺	
方ヶ野天満宮	方ヶ野	妙見神社、菅原神社
七ツ迫天満堂	七ツ迫	
田町天満宮	田町(馬見原)	天保十一年の碑あり
長浜神社	目細	天満神社天保十五年とあり
竹原天満神社	竹原	例年九月二十五日神楽が奉納される。
赤立天満堂	赤立	
高辻天満堂	高辻	
野原天満宮	野原(東竹原)	

柳天満堂	柳	
湛淵天満堂	湛淵	
才原天満宮	才原(柏)	鰐口あり。豊後府内駄原金屋植木利右衛門政幸の銘
米山天満堂	米山	
下神働天神堂	下神働	
伊野天神堂	伊野(玉目)	天満宮不動明王合祀してある。
稲生天神堂	稲生(長谷)	
岩下天神堂	岩下(大見口)	
百枝天満堂	百枝(上差尾)	
神の前天満堂	神ノ前	
白石天満堂	白石	
松葉天満堂	松葉(滝上)	
古町天満堂	古町(馬見原)	
玉目天満堂	玉目	
梶原天満堂	梶原	
旅草天満堂	旅草	

建造物 菅原市兵衛の墓 (二基)

所在地 大字菅尾

菅尾惣庄屋初代菅尾市兵衛の墓

貞享二年(一六八五)九月十四日

釋了安不退位

俗名 菅尾市兵衛尉

二代目菅尾市兵衛の墓

元禄十三年(一七〇〇)辰年

釋了慶不退位

五月十三日 春秋六二才

于時 元禄十五(一七〇二)壬午天

五月十三日建

二代目俗名

菅尾市兵衛尉吉秀

施主 山村 儀右門

菅尾 市兵衛

山村 栄八郎

以上の二基が当時の儘で残されている。

山村家累代の墓所に

「山村藤右衛門義秀、第一代菅尾市兵衛寛文十年(一六七〇)



四月肥後国主細川公ニ命ゼラレ米山大惣庄屋兼御代官ニ就任、同時米山号ヲ菅尾ト改称先祖代々山村家一族此ノ地ニ眠ル」との碑文のとおり、菅尾惣庄屋代々の墓所である。

建造物 今村山城守の墓 (一基)

所在地 大字米迫

今邑山城守 従五位下朝臣 源親貞

天正三年(一五七五)四月八日

号 光運院義英大居士

八十五才卒

である。

昭和三十年四月今

村家三百八十年の記

念事業として裔孫今

村虎熊氏が建立した。

今村山城守源親貞之

廟がある。



建造物 佐藤清左衛門尉忠重一族の墓 (一基)

所在地 大字柳

加藤忠広公の代に武藤内膳が早樫村に於て、千二百石を拝領の節に柳村にて二百石を拝領していたが、細川入国後は小笠原